

27PB-am124S

病院とクリニックの皮膚感染症外来患者から分離された黄色ブドウ球菌の分子疫学的解析

○杉山 拓¹, 中南 秀将¹, 野口 雅久¹ (¹東京薬大・薬・病原微生物)

【目的】黄色ブドウ球菌は、皮膚感染症の代表的な原因菌である。このうち、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌 (MRSA) は、多種の抗菌薬に耐性を示すため、難治性疾患を引き起こす。従来、クリニックよりも総合病院に通院している皮膚感染症患者の方が、重症度が高く治療が長期化することが知られている。本研究では、同一地域の病院とクリニックに通院する皮膚感染症患者から分離された MRSA の分子疫学的解析を行った。

【材料・方法】2008年から2015年に分離した病院の皮膚科外来患者由来黄色ブドウ球菌 178 株、クリニックの皮膚科外来患者由来黄色ブドウ球菌 911 株を使用した。薬剤感受性は、寒天平板希釈法により測定した。MRSA の同定、薬剤耐性遺伝子、毒素遺伝子の検出、SCC*mec* typing は PCR により行った。分子疫学的解析は、pulsed-field gel electrophoresis (PFGE)、multilocus sequence typing (MLST) により行った。

【結果・考察】MRSA の検出率は、病院の皮膚科外来患者由来株の方がクリニック由来株よりも高かった。分離された MRSA について SCC*mec* typing を行った結果、院内型の type I、II、III の割合は、病院の皮膚科外来患者由来株 (55.9%) の方がクリニック由来株 (33.1%) よりも有意に高かった ($P < 0.05$)。また、各種抗菌薬の耐性レベルは、病院の皮膚科外来患者由来株の方がクリニック由来株よりも高かった。一方、PFGE 及び MLST 解析では、病院の皮膚科外来患者由来株とクリニック由来株の遺伝学的背景に明確な違いは認められなかった。したがって、病院の皮膚科外来患者由来株は治療の長期化に伴い、薬剤耐性レベルが上昇した結果、難治化している可能性が強く示唆された。